

界であると考ええる。そして感覚は「本能」とも表現され、宿業の感覚と結びつけられる。「感に対して仏が応はれる。仏を感じればそこに仏現れる」。

こうした感応道交の関係を空間的に表現したのが穢土と浄土の関係である。感覚作用には不純な場合と純粹な場合がある。純粹であるとは、固定的な実体の世界の見方を離れていることである。不純粹感覚の総体（世界）を空間的に表現したのが穢土であり、純粹感覚の総体を空間的に表現したものが浄土なのである。穢土と浄土の対応関係は時間的にも表現される。一般に考えられる仏教史は、釈迦が仏陀となったことを端緒とする原始仏教から民衆思想としての大乗仏教への展開というものであるが、大乗仏教者としての曾我は、釈迦が仏陀となるための本質的要素が釈迦の成道以前にあり、それが親鸞まで、あるいは現在の仏教者にまで伝えられているというかたちで仏教史を捉える。では釈迦を仏陀とする本質的要素とはなにか。「親鸞に依れば『大無量寿経』の法蔵菩薩の伝説、之が釈尊を生み出した所の純粹の背景でなかつたであらうか」。それは法蔵菩薩の本願である。これを象徴ということでは、人々の感覚が純粹なものとなっていく過程、あるいは、形としては見えない法蔵菩薩の本願（利他的本能とでもいうべき純粹感情）を形にしていく過程が仏教史である。このとき現在、久遠の過去の本願が反映されたものとなる。

このような空間的・時間的構造をもつ象徴世界では、相対者と絶対者の人格的關係はどうなるのか。曾我は唯識の第七識である末那識を不純粹な我執の自己とし、第八識の阿頼耶識を

「固定しない純粹なわれ」「ほんとうのわれ」とする。そして阿頼耶識が法蔵菩薩であるとする。阿頼耶識は一切諸法を生ずる種子を蔵することから「蔵識」とも漢訳されるが、曾我は「法」の意味を「水のごとく流れて、一刻も停止するということはない」ものと解し、瞬間的に生滅する作用の不連続の連続体が阿頼耶識であるとするのである。こうして、感覚が純粹となって自己が「固定しない純粹なわれ」となるとき——この穢土が浄土の象徴となるとき——、自己と法蔵菩薩が対応し、自己が自己であるのみならず法蔵菩薩の象徴となる。われわれは自己の内奥で法蔵菩薩と関係するのである。感覚の純化にもなつて生じる行為が、人間と仏との感応道交としての南無阿彌陀仏にほかならない。

総じて曾我の象徴世界観はわれわれの日常の世界と仏（教）の世界とが結びつく可能性を開くが、その関係様式は感応の「道交」と表現され、相対者の世界と絶対者の世界という、完全には一体化しない別要素の交流であることが示唆されているといえよう。

西田幾多郎における罪・悪の問題

太田 裕 信

西田幾多郎は自身の哲学の根底を「宗教」に置いた。この「宗教」とはどのような意味をもつものなのだろうか。それを考えるとき、重要な点の一つが「罪」あるいは「悪」の問題で

ある。西田はその問題を、親鸞の思想やキリスト教の原罪の教義に触れながら、処女作『善の研究』から晩年に至るまで一貫して論じている。たとえば「実践哲学序論」という論文で「罪は自己自身の存在そのものにおいて考えられるのである。而して真に罪というものが考えられぬ所に、真に自己というものはない」と述べている。

このように西田は人間存在そのものの罪惡に深い眼差しをもっていたのであるが、この罪惡という問題は、〈哲学的には〉どのような考えられていたのであろうか。またそれは彼の「自己」の考え、および「宗教」の考えとどのように絡み合っているだろうか。本発表は、この問いを、西田がキエルケゴールの『死に至る病』の思想を受けながら書いた『哲学論文集第四』（一九四一年）と晩年の宗教論「場所的論理と宗教的世界観」における叙述を見ることで考察した。

西田はキエルケゴールの『死に至る病』における自己の定義「自己」とは、自己自身に關係する關係であるとともに、他者（神）によって措定せられた關係である」というテーゼに強い共感を示し、それを自身の哲学における「作られたものから作るものへ」「行為的直観」「ポイエシス」などの概念と重ね合わせて理解している。キエルケゴールによれば、自己とは有限性と無限性、必然性と自由の綜合であるが、この綜合の「不調和」の可能性が「絶望」と呼ばれる。この「絶望」は単なる憂鬱ではなく、絶望していない人にも見出されるものとして、人間の存在そのものに根差す普遍的・存在論的なものとして考えられている。しかし同時に、それはそれぞれの個性に無差別な

ものではなく、あくまでも個々人が「意志」によって招き寄せたものである。こうした「絶望」は、まさに「神の前に」おいであるとき「罪」に変化する。

こうしたキエルケゴールの罪の思想に西田は全面的に共感している。西田によれば「宗教」とは「自己存在そのものの問題」であり「自己成立の根本的事実」である。自己存在の根底の罪は単なる懦弱でもなければ、道徳的な罪責の念を指すのではない。この「自己自身の無の根底を、罪惡の本源を徹見すること」が宗教の本質である。普通の感覚では罪の自覚といえ、何か自我の能動的な働きを殺す消極的で悲觀的な響きを与えるであろう。しかし、西田は、宗教的自覚においてこそ「真の個」が成立し、己を尽くす仕方では現実に働きかける「絶対的能動」が出てくると主張している。

宗教的に言えば「原罪」「業の世界」「無明」や「迷い」といったものは、西田哲学においては「作られたものから作るものへ」と言われる矛盾的な自己の存在論的構造において成立する「絶望」的な「意志」であると言える。西田はこれを時にカントの「根本悪」という語を借りて表現している。こうした「罪」の理解は、迷信的神話的なそれを「自己成立の根本的事実」へと象徴的に捉えたものであり、その意味で西田哲学は「宗教的」な真剣さを持ちながら、「非宗教的」な立場に立っているということが出来よう。